

に巨大な会議を運営したことに感心すると同時に、率直に言ってこれではいくら何でも大きすぎて一つの会議として意味があるのだろうかという素朴な疑問をも抱いた。

その他印象に残っていることとして、会期中ずっと会場入口には女性ガードマンががんばっていて、参加登録

者以外は一切立入りを許さないようになっていた。原子力という分野の特殊性の故かとも思われるが、このような国際会議は初めての経験であった。

最後に、今回の会議出席にあたり、日本鉄鋼協会第7回日向方斉学術振興交付金の援助を受けたことを記す。

コ ラ ム

武田信玄の愛読書

原著者の詳細は不明であるが、足利時代末期に発行されたとされている「人国記」なる本がある。

内容は真にユニークな国別性格分析記録である。今日的に言えば、長期ベストセラー本である。当時の為政者はひそかに愛読し、口コミにつて再版を重ね、数種の写本も発行された。今日、宮内庁を初めとして、全国の官公市立の図書館に何種類かの写本が秘蔵されていることから、多くの読者の支持を受け、今日まで愛蔵されたものであろう。

中でも、武田信玄の愛読ぶりは史実にも残っており、隣国または他国との攻防には徹底的に活用した。すなわち常時座右に置いていたことはもちろんのこと、いつたん緩急あつて出陣ともなれば、該当国部分をすべて自ら扇面に写し、作戦期間中は、たとえ馬上にあつても常時携えていたとされている。NHK 中井貴一信玄にいつこの「人国記」を引用するカットが出てくるか、今から興味深い。(近年、抬頭時のジャック ニクラウスがトーナメント時に、靴、手袋にピッシリとゴルフベからず集を記入し、ショットごとにこれをチェックし、パートナーの響響を買ったことはあまりにも有名である。)

なお「人国記」の詳細は、岩波文庫に「人国記・新人国記」として刊行されているので、これに譲るとして、今日的に見ても一読巻をおくあたわざるの感が深いので、是非御一見をお勧めするが、2~3例をあげれば、次のごとくである。

全国60余州広しと言えども、最高得点は、人心の安定性、信義の豊かさなどすべての点で満点は信濃国であり、信玄の領地である甲斐国は必ずしも良くない点などは興味深い。また、中にはここに公表することも憚らねばならぬほど酷評された国もあり、とにかく往時の情報収集能力の高さに一驚する。

さて“鉄と鋼”は最近、面白いとか面白くないとかの論評を良く聞くが、本誌のごとく投稿原稿の羅列が主体という協会誌は21世紀まで命脈を保てるものだろうか。最近、好評と言われている雑誌はすべて取材記事のみで、必ず特定のフィルターを通っているものである。

本稿にとりあげた「人国記」も、あくまでも個人の喝破記事の集大成である。既に本コラム欄で取り上げられた(鉄と鋼, 74(1988), p. 398)ように、各論文に対し、少なくともレフリーの意志(オリジナリティの有無の表示、長所短所の指摘)の表明をすべきであろう。(日立金属(株)特殊鋼事業部 吉田勝彦)